

[研究論文]

沖縄¹以外の地域におけるエイサー団体について

中津川 祥子

はじめに

沖縄の盆行事で踊られるエイサーは、いまや沖縄のみならず日本各地において、またアメリカ合衆国やフランスなど、外国においても踊られている。本研究は、沖縄以外の地域で活動するエイサー団体（以下「沖縄以外のエイサー団体」と略）に焦点を当て、「エイサーの担い手」、「エイサーに使用する曲²」（以下「使用曲」と略）、および「演舞発表の場」という3点について沖縄でエイサーに取り組む人々との比較を行うものである。そのうえで、沖縄以外の地域におけるエイサー団体について、どのような位置づけが可能かを考察する。

沖縄以外の地域で活動しているエイサー団体を構成している人たちは、以下の2種である。すなわち、沖縄出身で現在は沖縄以外の地に住んでいる人と、何らかのきっかけを得てエイサーを演舞する団体の活動に加わっている、沖縄以外の地域の出身者である。現在、沖縄以外の地域の出身者たちが作るエイサー団体については、『エイサー倶楽部』³で確認できる限り45団体⁴に及ぶ。その団体に関する情報は各団体のウェブサイト入手可能である。

筆者は各団体のウェブサイトに載っている電子メールアドレスや電話番号を使って取材をし、各団体の情報を収集した。各団体に質問した事項は、団体発足の時期及び経緯や背景、使用曲のレパートリー曲名、練習場所について、そして新規団員を得るきっかけについてである。以上の事項があらかじめウェブサイトに記載されている場合もあるので、団体によって質問事項は異なる。本研究の対象となった団体は、上記の『エイサー倶楽部』に2004年8月31日までにリンクしたウェブサイトを持つ、沖縄以外の地域のエイサー団体全25団体のうち、筆者からの問いかけに対し応答のあった24団体である。

1. エイサーについて

1-1. エイサーとその歴史

エイサーとは、沖縄において旧盆の時期に踊られる先祖供養のための踊りである。宜保（1986）によれば沖縄の盆行事の流れは以下のとおりである。旧暦7月7日には墓の掃除をし、帰宅した後その日から旧15日まで朝夕、茶と水を仏壇に供える。そして旧13日には「ウンケー（お迎え）」と称し、夕方に門前で松明などを焚き、先祖を迎える。旧15日には「ウークイ（お送り）」と称して霊前にご馳走を供えた後、門前まで供え物を運んで先祖を送る。エイサーはこの日程の中

で踊られるが、踊る人々や、踊る時期については地域により異なる。

エイサーの起源についてはよくわかっていない（小林香代 1998a）。ただ、冊封使録⁵によれば、旧暦の7月15日、つまり盆にあたる時期に笛や太鼓の音にあわせて人々が歌ったり踊ったりし、騒がしく過ごしていたという記述があり、これが現在のエイサーと関係があるのではないかという考えが有力であるようだ。以下、エイサーの変化について岡本（1998）をもとに述べる。

エイサーは特に、沖縄市域において戦前と戦後でそのスタイルを大きく変えた。変化した点は具体的に、使用楽器や使用曲、衣装、踊りの隊列等に見ることが出来る。戦前のエイサーは、それぞれの集落ごとに、旧盆に念仏踊りとして踊られていた。踊りのスタイルは手踊りが主流で、現在のように大勢の太鼓群がいっせいに太鼓を打ち鳴らすというものではなく、衣装も浴衣や普段着を着て手ぬぐいを頭に巻き、ぞうりを履くなどして特には統一されず自由であることが多かった。エイサーの担い手は各字にある青年会⁶に属する男性が主である。女性には手伝いは頼んでも、エイサーには加わらせなかった青年会もあった。

戦後は、1956年からコザ市（現沖縄市）において全島エイサーコンクール（以下「エイサーコンクール」と略）が開催された⁷。エイサーコンクールは1956年に始まった行事である。1977年以降は点数を競うコンクールではなく、全島エイサーまつり（以下「エイサーまつり」と略）として毎年開催されている。岡本（1998）によれば、1977年の名称及び開催スタイルの変更の理由は、大きく分けて以下の三つである。一つ目は各集落・各青年会の特徴ある伝統芸能に甲乙をつけることの懸念、二つめはコンクールに落選した青年会が翌年から不参加になったこと、そして三つめは落選した青年会の者が審査員の家へ行って苦情などを言ったということである。これらの理由から、コンクールという形はとらなくなった。しかし、評価され点数がつくコンクールであったことにはいくつかの利点があったと筆者は考える。

まず、勝敗がつくことによって参加する青年会の中に競争心が生まれたことである。参加した青年会が、自分達の青年会に伝承されるエイサーを誇りそれぞれの個性を十分に引き出そうとした結果、演舞の水準が底上げされたのではないだろうか。

次に、「誰かに見せる」ということを意識したことにより、エイサーへの取り組みが活性化されたことである。岡本（1998）に「自分たち独自の隊形や衣装、レパートリーを作ろうと躍起になった」とあるように、沖縄内外を問わず、わざわざエイサーを見に来ている観客が飽きるようなことがないように参加者が工夫するようになったのではないだろうか。

以上のように、エイサーの歴史を振り返るとき、エイサーコンクール及びエイサーまつりの影響力は非常に大きいと筆者は考える。

1-2. エイサーのタイプ

小林幸男（1998）によると、沖縄のエイサーは、踊る時期・踊りの形態・使用曲・曲のテンポと数、及び曲順、歌唱構造、地謡以外の楽器と踊りの採り物、衣装、道化の存在という視点で分類することができる（表1）。現在沖縄で最も多く見られるタイプのエイサーは、表1の中部各市町村を中心に見られる締太鼓エイサーである。また、曲数や曲順については多少異なるものの、沖縄以外の地域でのエイサーの多くはこのタイプである。

1-3. 沖縄における担い手

田淵（2002）において、現在の沖縄でのエイサーは、大きく二つに分けられている。一つは「伝統的なエイサー」、もう一つは「創作エイサー」である。ここではその担い手に注目する。

「伝統的なエイサー」は先祖供養の目的の下、各集落の青年会のメンバーによって踊られている。彼らは伝統的な振りで踊り、旧盆の約2ヶ月前から活動を始める。本論ではこのような担い手を「伝統的な担い手」とする。

「創作エイサー」は先祖供養の目的を持たず、使用音楽や振り付けにおいて創作的な傾向の強いものである。このエイサーの担い手は、青年会とは様々な点で異なっている。まず、団体の構成メンバーには青年会のように地域的な結びつきはない。エイサーを演舞するという目的で結びついている。次に、旧盆だけに照準を合わせず、季節に関係なく演舞を披露する。演舞する場所も地域的な制約を受けず、テーマパークのような人の集まるところであることも多い。このような担い手を、以下「新しい担い手」とする。

1-4. 使用曲

沖縄市内の22の青年会を調査して挙げた曲数は38曲である。その使用頻度の高い曲上位10位は以下のようなようになる。

表2 沖縄市内青年会による使用曲上位10位（取材結果を基に中津川作成）

順位	曲名	青年会数 (%) ⁸
1	久高万寿主・唐船ドーイ	22 (100.0)

3	スーリ東	18 (81.8)
4	テンヨー節	16 (72.7)
5	仲順流り	15 (68.2)
6	あやぐ	10 (45.5)
7	いちゅび小・スンサーミ	8 (36.4)
9	海ヤカラー	7 (31.8)
10	トゥタンカーニ・固み節	6 (27.3)

これ以外の曲については、各青年会間で重なりはあまり見られない。また、「胡屋小唄」や「今帰仁節」のように、自分達の地区固有の曲を用いる青年会もある。

2. 沖縄以外の地域におけるエイサーについて

2-1. エイサー団体

本論の研究対象については既に述べた。しかし、沖縄以外のエイサー団体がすべてウェブサイトを持っているわけではないこと、また、もし持っていたとしても『エイサー倶楽部』にリンクしているとは限らないことから、実際の団体数はいくらか多い可能性もある。いずれにせよこのようなエイサー団体があると、沖縄以外でもエイサーを目にするチャンスが出来る。そのようなチャンスを得た人々がエイサーの存在を知り、興味を持てばエイサー団体の活動に加わる。現在はまだエイサーの知名度は高くないが、団体の増加に伴い、次第に認知度は上がっていくことも予想される。

沖縄以外の地域にある団体の共通した特徴は、メンバー募集において男女の制限がほとんどないこと⁹、年齢制限を設けていないこと、活動に参加できるという本人の判断があれば、居住地に関係なく入団できることなどが挙げられる。つまり沖縄以外のエイサー団体では、沖縄での伝統的な担い手とは異なり、性別・年齢・地域的制限を越えて人々が結びついているのである。

なお、研究対象団体の発足年は取材とウェブサイトから、表3に示した。

表3 対象団体の発足年

(中津川作成)

西暦	団体名 (都道府県)	備考
1989	ふらあーぬちゃー (石川県)	エイサーは2002年スタート

沖縄以外の地域におけるエイサー団体について（中津川）

1993	琉鼓會（兵庫県）京都琉球ゆう遊会（京都府）	
1994	遠州黒潮エイサー会（静岡県）	
1996	鼓・翔舞会（愛知県）	
1996-7	札幌エイサー隊（北海道）	2004年より7～8年前に発足
1997	鶴見エイサー潮風（神奈川県）	
1998-99	横田西多摩エイサー太鼓（東京都）	2004年より5～6年前に発足
1999	青海波（東京都）町田琉（東京都） うりずんエイサー（愛知県）	町田琉は青海波から分離独立して結成。うりずんエイサーは一度衰退し2001年1月に復活
2000	ていだエイサー隊（埼玉県） 宇座エイサー神奈川倶楽部（神奈川県） ひろしまエイサー琉風会（広島県） 山人島人う～まく太鼓（長野県）	
2001	エイサーシンカ太陽（茨城県）琉神（静岡県） みちのく祭り太鼓（岩手県） みなみかじエイサー団（香川県）	
2002	エイサーチームちゅらら～（奈良県） 静駿波舞音エイサー団（静岡県） 群馬エイサーシンカ舞人（群馬県） みやくエイサー（愛知県）	
2004	エイサー松阪八部衆（三重県）	

この表から 1996 年以降にエイサー団体の発足のペースが上がっていることが分かる。これは「ここ数年来エイサーがじわじわと広まりつつある」¹⁰ という記述を裏付けているともいえるだろう。

2-2. 団体の活動について

ウェブサイトにも共通して公開されている情報に、各団体の年間の活動スケジュール¹¹がある。各団体の練習に関する情報は、ほとんどの団体がウェブサイトで公開している。興味を持った人にとって、入団するか決める判断材料となるから

だろう。練習のペース及び練習をしている曜日について調査した結果、ほとんどの団体が週1回のペースで練習していること（17団体、70.8%）、練習する曜日は土・日であること（15団体、61.5%）がわかった。これらはいずれも、団員が学生や社会人であることが関係していると考えられる。平日はそれぞれ、学校や会社があるために人が集まりにくく、練習がしにくいのだろう。その点、土・日であれば人が集まりやすい。

だが一方で、家族を持つ団員が多いところの中には、彼らのために平日に練習を入れるところもある（遠州黒潮エイサー団¹³⁾。土・日の家族サービスの時間を奪わないようにするためであろう。

どちらにおいてもいえることは、団員の都合に合わせて練習日を設定しているということだ。琉神や、う〜まく太鼓など、演舞発表の日が迫ると練習日を追加するところもある。

また、これらの団体のすべてが、盆以外でもエイサーを踊っている。ほとんどが通年で練習をしたり演舞発表をしたりしているが（23団体、96.0%）宇座エイサー倶楽部のみ、11月から3月頃までをオフシーズンとし、要望の無い限り踊らない期間を設けている。しかし沖縄での青年会のように「6月から練習をはじめ、本格的にエイサー活動をするのは夏のみ」というような区切りを設けていないことが、沖縄以外のエイサー団体の共通した特徴である。

2-3. 沖縄との関連性

本研究の対象となっている24の団体が発足した経緯について質問し、その結果を以下の6パターンに分けた。

表4 団体結成にいたるまでのパターン（取材結果を基に中津川作成）

	パターン	団体数 (%)
A	沖縄を離れた沖縄出身者が中心的に関わって始めた	11(45.8)
B	エイサーをやってみたいと思った沖縄以外の地域の出身者が始めた	4(16.7)
C	それまで所属していたエイサー団体から独立して始めた	3(12.5)
D	自治体の単位で沖縄と関わったことから沖縄以外の地域の出身者が始めた	2(8.3)
E	沖縄芸能関連のイベントを通じて知り合った沖縄以外の地域の出身者が始めた	2(8.3)

F	他のエイサー団体の流れを受けて始めた	2(8.3)
---	--------------------	--------

パターン C の 3 団体の内訳は、沖縄以外の出身者が始めたところが 2 団体、沖縄出身者が始めたところが 1 団体である。また、同 F においては、沖縄出身者が始めたところが 1 団体、沖縄以外の出身者と沖縄出身者の両方が関わって始めたのが 1 団体である。

パーセンテージを見ると、パターン A が最も多い。彼らは故郷を離れてもなお、故郷を懐かしく思いながらエイサーをやっていると推測できるかもしれない。事実、パターン A の団体の中には、筆者の活動に関する質問に対し「故郷を思っている活動でしょうね」と答えた団体もあった（京都琉球ゆう遊会）。ほとんどの団体が発足する際に沖縄出身者が関わっているという結果から、沖縄以外の地においてエイサーを広めているのは沖縄出身の人々が中心という現状が見える。

また、団体内の沖縄出身者が存在するか、また、沖縄のエイサー団体とつながりがあるか質問した。この 2 点は、各団体と沖縄との結びつきを示しているとも言えると考えたためである。その結果、以下ようになった。

表 5 沖縄のエイサー団体とのつながり (取材を基に中津川作成)

記号	パターン	団体数 (%)
a	沖縄のエイサー団体から指導を受けたことがある（現在も受けている）	9 (37.5)
b	団体内に沖縄出身者がいたことがある（現在もいる）	15 (62.5)

パターン a の団体の中には、青年会からの指導は受けたことがなくても、沖縄へ実際に演舞を見に行くなどして交流をもっているところがある（うりずんエイサー・ひろしまエイサー琉風会）。沖縄内外のエイサー団体が「指導」とは関係のない交流を持っていることの現れである。

以上により、沖縄以外のエイサー団体のほとんどに、沖縄出身者が関係しており、沖縄内外のエイサー団体間の媒体は青年会及び沖縄のエイサー団体であることが分かる。関わり方は団体により異なるものの、沖縄以外の地でエイサーを習得する際、彼らの存在は大きいと考える。

2-4. 各団体の使用曲について

ウェブサイトと聞き取り調査から、各団体がどのような曲を使っているかが明

らかになった。曲数は全部で 57 曲¹³にのぼる。使用率の高い曲上位 10 曲を上げると、以下のようなになる。

表 6 沖縄以外のエイサー団体による使用曲上位 10 曲（取材を基に中津川作成）

順位	曲名	団体数 (%)
1	唐船ドーイ	21 (87.5)
2	久高万寿主	20 (83.3)
3	仲順流り	19 (79.2)
4	テンヨー節	13 (54.2)
5	安里屋ユンタ・スーリ東・いちゅび小	10 (41.7)
8	固み節	9 (37.5)
9	トゥータンカーニ	7 (29.2)
10	スンサーミ	6 (25.0)

これら 10 曲においては、先祖を敬う内容のもの（「久高万寿主」、「仲順流り」）、豊作を祝い自然を称えるもの（「テンヨー節」、「スンサーミ」）、男女の恋愛を歌ったもの（「スーリ東」、「いちゅび小」、「固み節」、「トゥータンカーニ」、「安里屋ユンタ」）というように分けられる。1 位の「唐船ドーイ」は、沖縄においても特に座の締め曲として用いられることが多い。軽快なテンポと明るい曲調から、華やかに座を締めることが出来るからだろう。

なお、上記の曲以外の使用曲を見ると、24 団体のレパートリー合計 57 曲を見たとき、一団体にしか使われていない曲は 36 曲にのぼる¹³。つまり半数以上が一つの団体だけのレパートリーになっているのである。それだけ、使用曲にはばらつきが見られるのだ。青年会等との付き合いがある団体はその青年会等の持ち曲を使用しているし¹⁴、自分達のオリジナル曲を持っている団体もある¹⁵。また、みやくエイサーのように「宮古民謡のよさを知ってもらいたい」と考え選曲する団体もあることから、使用曲には各団体の指向が反映されていると考える。

2-5. 地域との関連性

各団体のウェブサイト及び、どのような場でエイサーを踊っているかという質問により、沖縄以外の地域でエイサーが踊られる場として、以下のものが挙げられた。

表 7 演舞発表の場 (ウェブサイトと取材を基に中津川作成)

エイサーが踊られている場	団体数 (%)	具体例
地域の祭り	24 (100.0)	商店街の祭り・夏祭り
教育機関での行事	18 (75.0)	小学校の運動会・中高文化祭
結婚式	15 (62.5)	団体関係者等の披露宴 (非関係者含む)
福祉施設	13 (54.2)	老人ホーム・ケアセンター
沖縄関連イベント	13 (54.2)	各地でのエイサー祭り・エイサーライブ
デパート	7 (29.2)	沖縄物産展
国際交流イベント	5 (20.8)	韓日文化交流イベント・日米友好祭
その他	5 (20.8)	チャリティコンサート・会社パーティ

エイサー団体が演舞を披露する場所や場面は多岐に渡っている。中でも、地域で催される祭り各種には全団体が出演していることから、エイサー団体のある地域に住む人はエイサーを目にする機会があるといえるだろう。「実際の演舞を見て入団を決める人もいる」というコメントを寄せた団体もあり(みちのく祭り太鼓・ていだエイサー隊等)このように実際にエイサーを見せる場が、エイサー人口を増加させる一因となっていると筆者は推測する。

3. 比較・考察

3-1. 担い手について

筆者はエイサーの担い手を、沖縄での伝統的な担い手と新しい担い手という 2 タイプと、沖縄以外の担い手という計 3 タイプに分けた。三者の相違点は以下のとおりである。

まず、伝統的な担い手の活動は主として男性が行うことに対し、新しい担い手及び沖縄以外のエイサー団体では男女の制限がほとんどない。また、前者は地域的な組織であることに対し、後者の 2 タイプは、居住地に関係なく集まってきた人たちが結成している。そして、伝統的な担い手のエイサー活動は 6～9 月であることに対し、他 2 タイプの担い手はこの時期以外にも演舞する。

以上から、新しい担い手と沖縄以外の担い手は性別や居住地、活動する時期という点で類似しているといえる。

3-2. 使用曲について

沖縄市内青年会による使用曲 (表 2) と沖縄以外のエイサー団体による使用曲

(表6)を比較したところ、順位こそ異なるものの、「久高万寿主」、「唐船ドーイ」、「スーリ東」、「テンヨー節」、「仲順流り」、「いちゅび小」、「スンサーミ」、「トゥタンカーニ」、「固み節」の9曲が重複していることが分かった。これは、沖縄以外の地に沖縄市内青年会の使用曲レパートリーが流出していることの現れであり、それだけ沖縄以外のエイサー団体は青年会、つまり伝統的な担い手の影響を受けていると言えるのではないだろうか。

また、「2-3. 沖縄との関連性」で見たように、沖縄以外のエイサー団体はその4割弱が沖縄の担い手から指導を受けており、6割以上の団体の活動に沖縄出身者が関わっている。これらのことから、レパートリー流出のきっかけには沖縄出身者が関わっていることが推測できる。

3-3. 演舞発表の場について

沖縄においてエイサーが青年会によって踊られる場合、演舞はほとんどその青年会のある地区において見られる。「地区内において」というのは、練習場所がそれぞれの地区の公民館であることが主であり¹⁶、人前で踊るときは村の家々を一軒ずつ回ったり、途中で道端で踊ったりする為である。つまり、居住地から離れたところへわざわざエイサーを踊りに行くことはあまりないのだ。しかし、沖縄での新しい担い手はこういった地域的制限を受けない。依頼があればあったところへ出向いて演舞する。

一方、沖縄以外のエイサー団体が演舞する場は表7のようなものである。交通面や日程面で不都合が生じない限り、依頼があれば出向いて演舞する。つまり演舞する場は地域的及び季節的な制約を受けないのである。この点が沖縄での新しい担い手と共通している。

4. 結論

エイサーは、本来沖縄で奉納を目的とした固有の季節の行事の中で踊られていた。しかしエイサーコンクール・エイサーまつりを通して新しい担い手が出現したことにより、奉納という従来の目的に必ずしも沿わなくなった。その目的から外れてエイサーを踊る新しい担い手は、旧盆という季節的な制約を受けず、地域的な制約も伝統的な担い手ほどには受けない。本研究の対象である沖縄以外のエイサーの担い手も、季節的・地域的制約を受けずにエイサーを踊っている。また、奉納という目的も持っていない。

しかし、沖縄でのエイサーとまったく関連性がないというわけではない。使用頻度の高い曲は、伝統的なエイサーでのそれと重複している。沖縄を離れても、

使用曲という点では伝統的なエイサーとのつながりを持っているのである。

以上から、沖縄以外の地域におけるエイサー団体は、従来の目的や制約から外れてはいるが、使用曲では沖縄でのエイサーと共通点を持ちながら活動していると考ええる。

（本稿は、2004年度に提出したお茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士学位論文『沖縄以外の地域におけるエイサー団体について』に加筆・修正を加えたものである）

注

- 1) 本論では「沖縄」とは沖縄本島を指すものとする。
- 2) 沖縄でのエイサーで用いられる曲については、本来なら沖縄全体についての情報を集めたものを用いるべきであったが、そのようなものは入手できず、また、そのようなものがあるかどうかを確かめることは出来なかった。よって、本論では沖縄市内の青年会についての調査結果（沖縄市企画部平和文化振興課【編】：334-335.）を用いた。
- 3) おのおのの団体が開設しているウェブサイトを相互にリンクしあっているウェブサイト。URLは <http://www2.odn.ne.jp/~ccr52400/eisa/eisa.html>（2006年11月30日現在）。
- 4) 一つの団体内で支部ごとにウェブサイトを公開しているところは一つの団体として数え、リンクしているのが表紙のみ等で活動内容等が確認できないものは除く。
- 5) 冊封使がその冊封の顛末を記して皇帝に報告したもの（高橋1983）。
- 6) 各字や市町村ごとに結成されている青年の自主的な組織。年間を通しての活動は、各種のスポーツ活動、エイサーや盆アングマ、夜間パトロールなど青少年健全育成活動に代表される社会活動、地域の産業をにやう生産活動の4種が挙げられる（松田1983より抜粋）。
- 7) 「エイサーを見せることを主眼に置いた都市型イベントの成立」。（岡本：1998：56.）
- 8) 以下表中のパーセンテージはすべて小数点第二位を四捨五入したもの。
- 9) 八部衆のみ「女性は手踊りのみ」という条件をつけて参加を募集している。
- 10) 小林香代：1998b：272.
- 11) 「活動スケジュール」とは、練習をする日時や演舞発表の予定を含むもの。
- 12) 取材した2004年当時の状態。「来年は独身の若者が社会人となるため、彼らの動き次第では土日昼間練習も可能性が出て来るでしょうね」（筆者への返信）

より抜粋)

13) 具体的には、表 6 にある曲のほかに「ミルクムナリ」「豊年音頭」「南獄節」「海ヤカラー」「豊節」「三村踊り」「滝落とし」「年中口説」「花の風車」「ていんさぐぬ花」「国頭サバクイ」「風の結人」「安波節」「七月エイサー待ちかんでい」「七月十五日」「長浜節」「高離り節」「稲しり唄」「胡屋小唄」「ヒヤミカチ節」「島めぐり」「パラダイスうるま島」「汗水節」「宇座村の栄い」「まーかいが」「地翔びどーい」「獅子 Gong!Gong!」「あしびなー」「秋の踊り」「湊くり唄」「満名川の泉」「与那国の猫ぐわー」「サイヨウ節」「中立ぬみがかま」「古見の主」「なりやまあやぐ」「漲水のクイチャーびよんびよん」「おじい自慢のオリオンビール」「竹富島であいましょう」「島唄」「大きな古時計」「平和の琉歌」「ANTHEM」「GO!GO!AHEAD」「かりゆしの夜」「繁盛節」「らくえんほいくしょ」がある。曲名に下線の引いてあるものは一団体にしか使われていないことをさす。

14) 町田琉における「胡屋小唄」。

15) みなみかじエイサー団における「らくえんほいくしょ」等。

16) 沖縄市観光協会(編):2004:3.

17) 小林幸男 1998 においては、曲の遅速には具体的な基準が挙げられていない。

18) 本調子のみで終わるときもある。その際健堅辺名地でなく唐船ドーイで終わる。

19) 手踊りエイサーでも景気付けに1、2の太鼓が加わることがある。

20) 特に名護市やその周辺で使い方が最も発達している。

21) 叩き鉦は必ずしも使われるわけではない。

【参考文献】(50音順、抜粋)

井口, 淳子

2002 「ウチナーンチュ(沖縄人)になるためのエイサー—尼崎・琉鼓會にみる芸能—アイデンティティの関わり—」.『大阪音楽大学研究所年報 音楽研究』. 18:5-22.

池宮, 正治

1998 「エイサーの歴史」. *in* 沖縄市企画部平和文化振興課(編) 1998:24-35.

岡本, 純也

1998 「戦後沖縄社会におけるエイサーの展開」. *in* 沖縄市企画部平和文化振興課(編) 1998:53-69.

沖縄市企画部平和文化振興課（編）

1998 『エイサー360度—歴史と現在—』 沖縄：那覇出版社.

沖縄市観光協会（編）

2004 『MANGLERS MAGAZINE vol.20』 沖縄：琉球出版.（沖縄市による観光者向けパンフレット。非売品）

沖縄大百科事典刊行事務局（編）

1983 『沖縄大百科事典 中』 沖縄：沖縄タイムス.

宜保，栄治郎

1986 「沖縄の芸能と念仏踊」. in 南島史学会（編） 177-188.

小林，香代

1998a 『演者たちの「共同体」—東京エイサーシンカをめぐる民族誌的説明』
1997年度お茶の水女子大学比較文化学博士論文.

1998b 「首都圏のエイサーについて」. in 沖縄市企画部平和文化振興課（編）
1998：272-280.

小林，幸男

1998 「エイサーの分類」. in 沖縄市企画部平和文化振興課（編）1998：36-52.

田淵，愛子

2002 「沖縄観光におけるエイサーの概観—エイサー団真南風を中心に—」. 『ム
ーサ』39-51.

高橋，俊三

1983 「冊封使録」. in 沖縄大百科事典刊行事務局（編） 1983：中：211.

東京国立文化財研究所（編）

1993 『芸能の科学 21 芸能論考 XIV』 東京：東京国立文化財研究所.

松田, 政弘

1983 「青年会」. *in* 沖縄大百科事典刊行事務局 (編) 1983 : 中 : 555.

南島史学会 (編)

1986 『南島—その歴史と文化—』 東京 : 国書刊行会.

【インターネット資料】

各団体公式ウェブサイト及び『エイサー倶楽部』

なかつがわ さちこ

お茶の水女子大学卒業、同大学大学院博士前期課程修了。現在、同大学院博士後期課程に在学中。声楽専攻。

表1 沖縄でのエイサーの分類（小林幸男 1998 を参考に、中津川作成）

形態	手踊り（女）	手踊り（男女）	締太鼓（男）	パーラン鼓（男）
地域	本島北部西岸（国頭村・大宜味村）	本部半島周辺（本部町・名護市等）	中部各市村	主に与勝半島
時期	国頭村：旧暦 7 月 13 日夕方から 大宜味村：盆の後初亥の日の翌日午後	旧暦 7 月 15 日の送り火を済ませた後から		
曲数	10～20 曲		10 曲前後	
時間	20～40 分	10～20 分	20～40 分	
曲順	長念仏→早念仏→速い曲 ¹⁷ →遅い曲→速い曲…→唐船ドーイ	本部町：門付歌→念仏→本調子早弾 <small>きんきんみなち</small> →健壁辺名地→一二揚の早弾曲 ¹⁸ 今帰仁村：短い念仏→門付歌→一連の本調子早弾きの曲→健壁辺名地	念仏→本調子の一連の曲（一二揚を加える場合も有り）→唐船ドーイ	念仏→一連の曲→退場の曲
歌唱構造	曲の 4 割程を踊り手が歌う。	地謡と踊り手との掛合が多い。歌う割合は同程度。	3 割程が踊り手の囃子言葉。	歌うのは地謡のみ。
楽器/採物	扇・四竹・采・手拭・手巾・太鼓 ¹⁹	扇・四竹・采・手拭 ²⁰ ・太鼓 ¹⁹	太鼓と叩き鉦 ²¹	
衣装	浴衣が一般的。手踊り衆は頭に前結びの白い鉢巻を巻く。	太鼓：薄い陣羽織と白シャツ、白ズボンや脚半。頭には頭巾や頭巾に長巾を足してつける。手踊り：浴衣。鉢巻は黄色やカラフルなもの。		
道化	いる（旗持ち）	いない	いる（京太郎等の名を持つ滑稽役）	